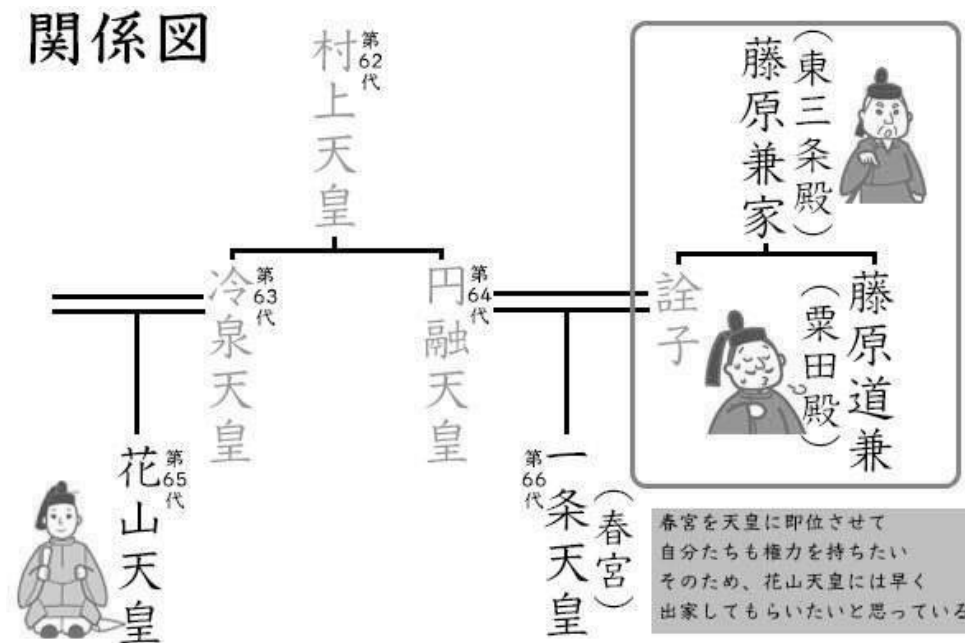


「花山天皇の出家」人物相関図



<https://shingakunet.com/journal/exam/20201216000001/>

「花山天皇の出家」 本文解説 ②

あはれなることは、ありおもしろしける夜

(S) 語 ↓ 花 過 去 体

しみじみと心痛みますことは、ご退位におなりになった夜

敬用 (S)

は藤壺の上の御局の小戸より出てさせ給ひ

ふじつば
みつばね
語 ↓ 花 語 ↓ 花
敬用 (S)

は、(花山天皇が)藤壺の上の御局の小戸からお出ましに

過 去 体

けるに、有明の月のいみじく明かかれ

過 去 已 過 去 已

なられたところ、有明の月がとても明るかった

「**証にこそありけれ。**」いかがすべから

「あまりに明るくて、人目に立ち過ぎるなあ。」
敬用 S 敬用 過 去 体
量 推 体
どうするのがよい

「む」と仰せられけるを、「さりとして、

だろうか。」とおっしゃったところ、「そうかといって、

敬用 (S) 然 体
尊 用 S 然 体
粟 ↓ 花 粟 ↓ 花 当 体
動 詞 四 自 由 粟 ↓ 神・宝 完 了 体
御出家を(留まりなさることができする方法はございません。
神璽と宝剣が

栗田殿の方へ)お渡りになってしまったからには。」と、

渡し給ひぬるには。」と、栗田殿の下わがし

(K) (S) 去 体
語 ↓ 花 語 ↓ 粟 過 去 体
申し給ひけるは、まだ帝に出てさせやしまさ

消 用 打 用 過 去 体
さりとて先に、手づから取りて、春宮の御方

ながらなかった前に、(粟が)自分の手で取って、皇太子のところ

■ 「花山天皇の出家」 本文解説①

次の帝、花山院の天皇と申しさしき。冷泉院第
 次のの帝は、花山院天皇と申しました。
 冷泉院の第

一の皇子なり。御母、贈皇后宮懷子と申す。
 一皇子です。
 御母君は、贈皇后宮懷子と申します。

永観二年八月二十八日、位につかせ給ふ、
 永観二年八月二十八日、位におつきになりました、

御年十七。寛和二年丙戌六月二十二日の夜、
 御年は十七歳。寛和二年丙戌六月二十二日の夜、

あさましき候ひしことは、人にも知らせさせ
 驚きあきされるばかりでございましたことは、人にもお知らせに
 (S) 消統
 語↓花 打接
 給はて
 S 語↓花
 ならぬで、こつそりと花山寺におでましになつて、
 敬 尊用 (S) 用 用
 語↓花 語↓花 完 過
 出家・入道なされてしまったことでした。御年は十九歳。世
 敬 尊用 (S)
 語↓花 語↓花
 を保たせ給ふこと二年。そののち、二十二年
 をお治めになること二年。
 S 語↓花 過 去
 おはしましき。
 ご存命でいらつしやつた。

「花山天皇の出家」 本文解説 ③

詞四(K)(S)已去
動サ語↓春語↓粟完過
他サ語

に渡り奉り給ひてければ、帰りにらせ給はむ。
にお移し申し上げなさってしまったので、(花が)お歸りになるような

ことはあるまじく思ひて、しか申させ給ひ
ことはあつてはならないとお思ひになつて、そのように申し上げ
過去体 過

けるとぞ(聞きける)。
なされた(聞いた)。

さやうき影を、まばゆい思ひ召しつるほど
S語↓花 完了体

(花山天皇が)明るい(月の)光をまぶしく気が引けることとお思ひに
なつていたうち

に、月の顔にむら雲のかかりて、少し暗がり
少しくなつて

ゆきければ、「わが出家は成就するなり」
過去体 断用

「私の出家は、成就するので
いつたので、
嘆止 敬用
詠止 S
語↓花語↓花
尊用
(S)
敬用
語↓花語↓花
尊用
(S)

けり。」と仰せられて、春み出でぎせ給ふほ
なあ。」「とおっしゃつて、
歩き出しなざる

どに、弘徽殿の女御の御文の日ごろ破り残
同格
弘徽殿の女御の御手紙で、
消用 S
打用 語↓花 過去体
して御身も放たず御覽じけるを
残して肌身離さずご覧になった御手紙を

■「花山天皇の出家」 本文解説④

S 語↓花
思ひ出し出でて、「しばし。」とて、取りに
思い出しなさて、「少し(待て。)」とおつしやつて、取りに
了 完
「いかにかくは思ひ召しならせむはしまし
「どうしてこのように(未練がましく)お思いになつてしまわれ
了 完
ただ今過ぎば、おのづから障りも
たのですか。ただいま(の機会が)過ぎるならば、自然と
意未推止
強
出でまうて来なむ。」と、
さつと出て参りましょう。」と、
うそ泣きなさつ
けるは。
たのは。

さて、土御門より東ざまに率て出だし
さて、(粟が)土御門大路を通つて東の方角に(花を)連れ出し
(K) 語↓花 語↓粟
参らせ給ふに、清明が家の前を渡らせ給へ
申し上げなさる時に、(安倍)清明の家の前をお通りになる
ば、みづからの声にて、手をおびたたり、
(清明)自身の声で、
手をはげしく、

■「花山天皇の出家」 本文解説⑤

はたはたと打ちて、「帝ありてせ給ふと
「帝がご退位になると
下 完
天変ありつるが、すでにににけりと
思われる天変があつたが、すでに(このことは)実現してしまつたと
思われることだなあ。参内して奏上しよう。車の支度を早く
鬼ゆるかな。参りて奏せむ。車に装束と
ク用(ウ音便)
世よ。」といふ声聞かせ給ひけむ、さりとも
せよ。」という声をお聞きになつたのだらう、そうはいっても、
あはれは思ひ召しけむかし。「かつがつ、
しみじみと悲しくお思いになつただらうよ。(晴が)「とりあえず、
式神一人、内裏へ参上せよ。」と申し上げたところ、目に
式神一人、内裏に参れ。」と申し上げたところ、目に
は見えぬものの、戸をおしあけて、御後ろを
は見えないものが、戸を押し開けて(外へ出て、(天皇の)後ろ姿を
見申し上げたのだらうか、「ただいま、ここをお通りになつて
おはしますめり。」と答へけりとかや。
と答えたとかいうことです。

■「花山天皇の出家」 本文解説⑥

その家、土御門町口なれば、御道なりけり。
その(晴の)家は、土御門町口にあるので、(花がお通りにな
る)御道筋だつたのでした。
花山寺に拂はしめし着きて、御髪下ろさせ
(花山天皇が)花山寺にご到着になつて、ご剃髪
(S) 語↓花
給ひて後にぞ、粟田殿は、「まかり出でて、
なさつてのちに、
粟田殿は、
「退出いたしました、
大臣にも、来はらぬ姿、いま一度見え、かく
(父の)大臣にも、(出家前)の変わらない姿をもう一度見せ、
(こう)こ
と案内申して、必ず参り侍らむ。」と申し
と事情を申し上げて、必ず(戻つて)参りましょう。」と申し上げ
(S) 語↓粟 去
給ひければ、「我をば護るなりけり。」とて
なさつたので、(花は)「私をだましたのだなあ。」とおつしやつて
敬用
お泣きになつたのであつた。お気の毒で悲しいこと
なりな 日ごろ、よく、「御弟子にて
ですよ。(粟は)常日頃、よく、「(自分も出家して、あなたの)
候はむ。」と契りて、
お仕えいたしましょう。」と約束して、

■「花山天皇の出家」 本文解説⑦

おかし申し給ひけむがおそろしさよ。
だまし申し上げなかつたとかいうことの恐ろしさよ。
東三条殿は、もしさることや給ふ
東三条殿は、もしかして(粟が)そのようなことをなさるのでは
と危ふさに、
という心配から、相応に分別のある人々、
がしかがしといふいみじき源氏の武者たちを
がしだれそれという
有名な 源氏の 武者たちを、
こそ、御送りに添へられたりけれ。京のほど
(花の)お見送り(の護衛)として添えられたということだ。京のうち
は隠れて、堤の辺よりぞ申出で参りける。
は隠れて、(鴨川の)堤のあたりから姿をあらわし(てお供)申し上
げた。
寺などにては、もし、おして人などやなし
寺などでは、
もしや無理に人などが(粟を)剃髪させ
奉るとて、一尺ばかりの刀どもを抜きかけて
申し上げるのではないかということ、一尺ほどの刀を手
に抜きかけて
ぞ参り申しける。
お守り申し上げたということだ。

■ 論語について（二年後期期末の復習！）

● 論語

↓ 孔子の言行や弟子との問答・教えについて、後世に弟子たちがまとめたもの

○ 儒家

↓ 孔子とその弟子たちが形成した思想家集団

◆ 孔子について

・ 春秋時代に魯の国に生まれる

・ 魯の国の政治家として政治改革を行おうとするが失脚

↓ 十数年にわたって諸国を遊説し、理想の政治を説くも、諸侯らには受け入れられず：

【孔子の思想】

● 仁 ↓ 孔子が掲げた道德の理想。他者に対しては

「恕（思いやりの心）」をもち、自己に対しては「忠（まごころ）」を持つこと。

● 礼 ↓ 社会秩序を維持する根底となる規範。また、「仁」が行為として外にあらわれたもの。

● 徳治主義 ↓ 力によるのではなく、為政者の道德性によって政治を行う。

■ 本文概要

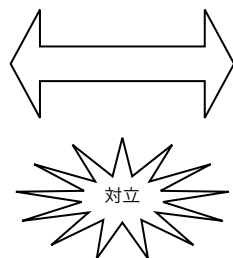
◎ 論語

孔子の弟子たちが記した

儒家思想

↓ 為政者・リーダー論

儒家―孔子



道家―莊子・老子

↓ 無為自然・民衆論

■ 「長沮・桀溺」 本文解説①

長沮・桀溺、耦而耕。

孔子過之、**使**子路問津焉。

長沮・桀溺、耦して耕す。
長沮と桀溺が、二人並んで耕していた。

孔子之を過ぎ、子路をして津を問はしむ。

孔子がそこを通りかかり、子路に川の渡し場を尋ねさせた。

■ 「長沮・桀溺」 本文解説②

長沮曰、「夫執輿者為誰。」

子路曰、「為孔丘。」

曰、「是魯孔丘与。」

曰、「是也。」

長沮曰はく、「夫の輿を執る者は誰と為
長沮が言うことには、「あの車の手綱を持つ人は誰か。」と。

す。」と。

子路曰はく、「孔丘と為す。」と。
子路が言うことには、「孔丘です。」と。

曰はく、「是れ魯の孔丘か。」と。
（長沮）が言うことには、「それは魯の孔丘か。」と。

曰はく、「是れなり。」と。
（子路）が言うことには、「そうです。」と。

■「長沮・桀溺」本文解説③

曰、「是知津矣。」

問於桀溺。

桀溺曰、「子為誰。」

曰、「為仲由。」

曰はく、「是れなれば津を知らん。」と。
（長沮が言うことには、「そうならば川の渡し場を知っているだろう」）

桀溺に問ふ。
（子路が）桀溺に尋ねた。

桀溺曰はく、「子は誰と為す。」と。
（桀溺が言うことには、「あなたは誰だ。」と。）

曰はく、「仲由と為す。」と。

（子路が）言うことには「仲由です。」と。

■「長沮・桀溺」本文解説④

曰、「是魯孔丘之徒与。」

対曰、「然。」

曰、「滔滔者、天下皆是也。」

而誰以易之。

曰はく、「是れ魯の孔丘の徒か。」と。
（桀溺が言うことには、「ということは魯の孔丘の弟子か。」と。）

対えて曰はく、「然り。」と。
（子路が）答えて言うことには、「そうです。」と。

曰はく、「滔滔たる者、天下皆是れなり。」

（桀溺が）言うことには、「水が流れゆくように、世の中がみな悪い方向へ向かっている。」

而して誰と以にか之を易へん。

それなのに誰とともに世の中を変えようというのか、いや、誰とも変えられない。

■「長沮・桀溺」本文解説⑤

且而与_レ其従辟人之士也、

豈若従辟世之士哉。」

擾而不輟。

且つ而其の人を辟くるの士に従はんよりは、
かつまたお前も、つまらない人避けて立派な人を選んで仕えようとする人に従うより、

豈に世を辟くるの士に従ふに若かんや。」

（俗世を避けて隠棲する人に従う方が良くないだろうか（いや、俗世を避けて隠棲する人に従う方がよい）。」と。）

擾して輟めず。

（桀溺は）まいた種に土をかけて手を休めることはなかった。

■「長沮・桀溺」本文解説⑥

子路行以告。

夫子憮然曰、「鳥獸不与同群。

吾非斯人之徒与而誰与。

天下有道、丘不与易也。」

子路行きて以て告ぐ。

子路は戻っていつて告げた。

夫子憮然として曰はく、
先生がっかりして言うことには、

「鳥獸は与に群を同じくすべからず。

（鳥獸とは、群れを共にすることはできない。）

吾斯の人の徒と与にするに非ずして、誰と与
（私はこの世の中の人々と一緒に生きるのてなければ、一体誰と共に生きようか（いや、他の何ものとも生きない））

にかせん。

天下道有らば、丘は与に易へざるなり。」

もし天下に道があるならば、丘（私）は誰かと共に世の中を变革しようとは思わないのだ。」と。